

「父のところには」

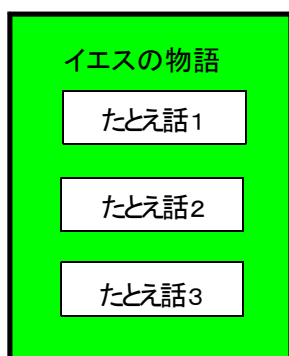
(放蕩息子の帰還)

(ルカ15:11~32)

挽地茂男

2019.7.7 日本基督教団千歳丘教会

先週からルカによる福音書の15章を読み始めました。この箇所には、三つのたとえ話が出てきます。それぞれが「失われたもの」が「見出される」(Lost-Found)というテーマを具体的に示すお話になっています。たとえ話1は、「見失った羊」(The Lost Sheep)のたとえです(v.4-6)。羊飼いが九十九匹の羊を残して無くした一匹の羊を捜し回り、見つけた羊をつれかえって、友達や近所の人々を呼んで、一緒に喜ぶだろう、というお話です。そして、たとえ話2は、「無くした銀貨」(The Lost Coin)のたとえです(v.8-9)。女が無くした銀貨を家捜しして見つけたとしたら、友達や近所の女たちを呼んで共に喜ぶだろう、というお話です。そして、たとえ話3が今日読みます「失われた息子(放蕩息子)」(The Lost



Son)のたとえです(v.11-32)。

先週この15章の物語の構造を見たときに、たとえを囲んでいる枠物語(イエスの物語／話の本筋／地の文)にも注目しました。そして、たとえ話と枠物語は、互いに説明し合う関係にあることを確認しました(相互説明性)。もう一度、枠物語の主張を確認しておきましょう。まず一つ目の枠物語。

① 1-3節。15:1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。そしてこれに続いて「見失った羊」のたとえが語られます。そして、二つ目の枠物語。② 7節。15:7 言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正



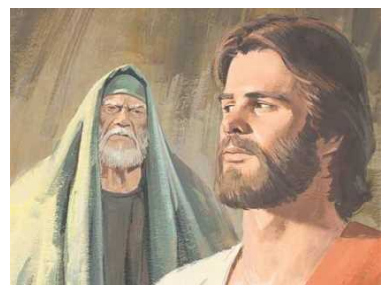
しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」これに続いて、「無くした銀貨」のたとえが語られて、三つ目の杵物語。10節。15:10 言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」そしてこれに続いて、最後の「放蕩息子」のたとえが語られます。杵物語のテーマは明白です。「一人の人の悔い改めの大切さと喜び」です。そしてこのテーマを説明するために、三つのたとえ話を配置しているのです〔パラボレーして(=そばに置いて)いるのです〕。つまり三つのたとえ話は、一貫してこのテーマの具体的な実例を示しているのです。

さて主イエスの語るこの話を実際に聞いているのは、誰だったでしょうか。それは15章はじめの杵物語に登場する「ファリサイ派の人々や律法学者たち」です。最初に語られた二つの譬話は、失われた者——つまり羊の群れから離れて生存の危機にさらされ、また、銀貨の持ち主の手から離れて本来の役割を失って、既に本質的に死んでしまった者——を憐れんで、ひたすら捜し出す神さまの愛を語

っています。その愛が、罪人が悔い改める前提、あるいは根拠なのです。そして「放蕩息子」のたとえ話では、登場人物の「弟」と「兄」と「父親」が、最初の杵物語に登場した「徴税人や罪人」(弟)、「ファリサイ派の人々や律法学者たち」(兄)、そして「神」(父親)の寓意となっているのです。

さて今日は、この「放蕩息子の」のたとえ話の中の「弟」だけに焦点を当てます。11節。「15:11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。」主イエスは、「ある人に息子が二人いた」と語り始めます。この二人が兄弟であることは明らかですが、この兄弟が一緒にいる場面は描かれていません。息子が二人いるけれど、二人が——「徴税人や罪人」と「ファリサイ派の人々や律法学者たち」がそうであるように——同じ食卓に着くことはない。この書き出しには、そういう雰囲気漂っています。実際、弟は兄と共にこの家に居続ける気はありません。12節。

「15:12 弟の方が父親に、



『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。」家督は兄が継ぎます。律法の規定に従えば、弟は兄の半分の財産を受け継ぐことになっています。だから、父の財産の三分の一ということになります。弟は、その財産を生前分与して欲しいと願うのです。父の財産の一部を得て、父を養うのではなく、努力して積み上げた父の財産を、父の生前に湯水のように使い果たしてしまうということは、それは生きながらにして父を殺すに等しいことでもあります。貰うべき財産さえ貰えれば、彼は家を出て遠い国に旅立ち、父と子との関係をもつ気はないのです。父は、弟の言葉、その時の表情、また声の調子によって弟が考えていることが分かったでしょう。でも、「父親は財産を二人に分けてやった」のです。もちろん、兄がその



財産を自分のものとするのは、父が死んだ後です。ここでは、同時に、三分の二の財産を兄のものとして確定したということでもあるでしょう。

そして13節。「15:13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。」下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまうのです。財産には不動産だとか家畜とかも入っていたでしょうから、それらを持っていくことが出来ませんので、それを金に換えなければ、彼は出ていくことができません。彼にとっては、父の家を出ていくことが大事であり、金はその道具なのです。だから、彼は無駄使いしてしまうのです。金そのものが大事なら、増やすために努力するだろうと思います。「全部を金に換えて」はある意味で良い訳だと思いますが、「すべてを集めて」(συναγαγὼν πάντα)が直訳です。それに対して、「無駄使いをする」が「すべてを散らしてしまう」(δαπανήσαντος δὲ αὐτοῦ

πάντα)です。集めたものを全部散らしてしまう、ばら撒いてしまう。



「放蕩の限りを尽くした」のです。

この「放蕩の限りを尽くす」という言葉は、他の箇所では酒に酔いしれて「身を持ち崩す」とか、「ひどい乱行に加わる」とも訳される言葉で「救い難い」ことを表す言葉です。その放蕩の故に父の財産はまさにあぶく銭となり、またたく間に消えて無くなってしまいました。自分で苦労して稼いだものでなければ、その有難味が分からないのはいつの世でも同じことです。彼は、父が必死になって築いた「財産」が何であるかを知らないのです。それが労苦と生きる知恵の結晶であることを知らないのです。それこそが、まさに救い難いことです。



彼が目指した「遠い国」とは、ユダヤ人から見れば異邦人世界のことであり救いの対象外なのです。それは、その地の人々が豚を飼っていることから分かります。豚は、ユダヤ人が決して口にしない汚れた動物です。彼は父の財産を元手に一旗揚げようと思っていた訳ではなく、とにかく父の許から離れる、それも少しでも遠く離れることを願っていたのだろうと思います。そこに、自由があると思っていたのでしょう。そして、たしかにそこには自由があったのです。どのように生きてもよいという自由がありました。それは破滅に向って生きる自由でもあるし、天に向って居住まいを正しつつ生きる自由でもあるのです。わたしたちは自由を求めますし、大人になれば自由が与えられます。だからこそ、そこに責任が生じるのです。

自由を行使する時、その行いの結果責任はその人にあります。親のせいでも教師(先生)のせいでもなく、エデンの園の出来事も女のせいでも蛇のせいでもない。どういう誘惑があったとしても、自分が園の中央にある木の実を取って

食べたのですから、その行為に対する責任はその人にあります。他の誰も代わりようがないのです。そのことを知る。それは人間として大切なことです。だから、父親も息子の言いなりになったのかもしれません。自由を行使することでしか、人は自分が何者であるかを知ることはないからです。

そして14－15節。「15:14 何もかも使い果たしたとき、その



地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。

15:15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。15:16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。」弟息子は、自分が今、全く庇護のない所に生きていることを知りました。誰も食べ物をくれないのです。飢饉ですから皆が飢えていたとしても、豚の持ち主が豚の餌を食べたいほど飢えていた訳ではないでしょう。その気になれば自分の食

べ物を分け与えることは不可能ではなかったでしょう。しかし、誰も彼に食べ物をくれないのです。彼はこの国の人にとって同胞でもないし、いきなり大金をもって外国から来て、町で放蕩の限りを尽くしている愚かな若者に過ぎないのです。若者の噂はすぐに広まったでしょう。そういう若者を評価する人間はいないし、身を持ち崩した姿を見れば、同情するよりも「それ見たことか」と思うのは当然でしょう。まさに見捨てられていくのです。そして、そこまで落ちた時に、彼は「我に返った」のです。

17－19節。「15:17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。15:18 ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。15:19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と』。」「我に返った」はよい訳ですが、直訳は「自分自身の所へ来た」(εἰς ἑαυτὸν δὲ

ἐλθὼν)あるいは「行った」です。本来の自分に立ち返った、という意味です。その上で、彼が自分自身に語りかける言葉の中には、重要な言葉が隠されています。残念ながら日本語訳にそれが出ていません。最初のたとえ話に出てくる羊飼いが捜していたのは、ただの「一匹の羊」ではなく「わたしの羊」と書かれています。代わりがない羊です。また、女が捜していたのも一枚の銀貨ではなく「あの銀貨」なのです。〔研究者によ



ると、それは花嫁が嫁入りに際して携行する十枚の銀貨を指しているとする者もいます。〕他の銀貨では駄目なのです。弟息子



は「父のところでは」と言いますが、原文では「わたしの父のところでは」です。「ここを立ち、父のところ



ろに行って言おう」も「わたしの父のところ」なのです。息子が我

に返って気がついたことは、あの父親は「わたしの父」であるということです。自分の命の源としての父です。その父なくして自分の命など存在しないという意味での「わたしの父」です。その父の許では、雇い人たちも有り余るほどのパンを食べている。それは父が金持ちであることを表すだけでなく、父が誰に対しても憐れみ深く接する人間であることを暗示している言葉だと思います。

しかし、彼も、息子として父の許へ帰ることができるとは思えません。「もう息子と呼ばれる資格はありません」の「息子」も「あなたの息子」です。18節以降の「息子」や「父親」という言葉には、原文では「あなたの」とか「わたしの」という言葉がついています。父と息子の人格的な関係が強調されているのです。弟は、自分と父は互いに掛け替えのない存在であることに気づいたのです。しかし、それはその人格的な関係を、自分で捨ててしまってからのことでした。

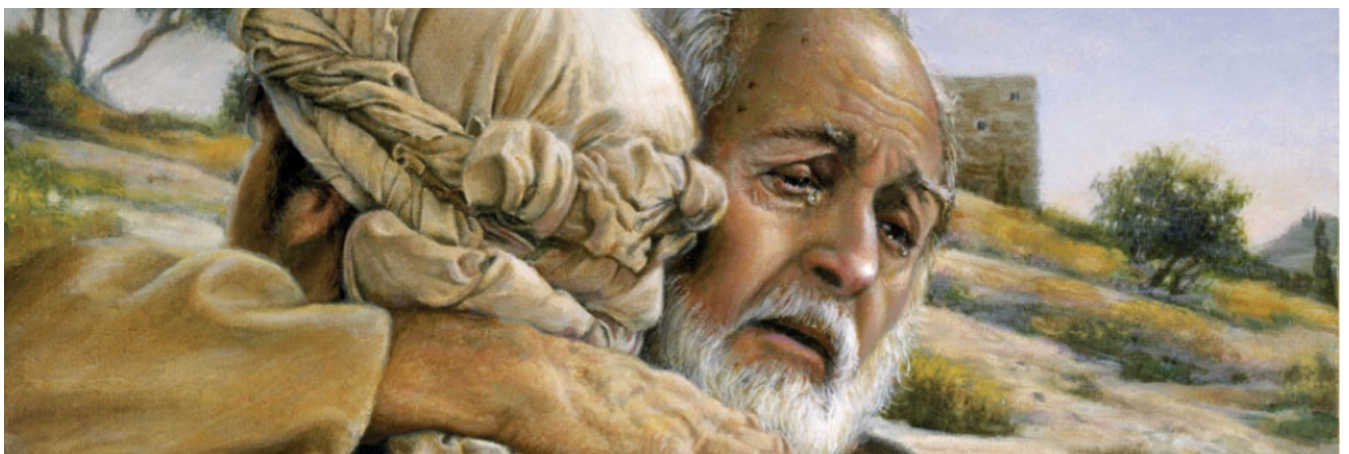
そして20節。「15:20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。」この「父親のもとに行っ

た」は原文(ἦλθεν πρὸς τὸν πατέρα
ἐαυτοῦ)では息子が「我に返った」
(直訳は「自分自身の所へ行った/
来た」)という表現と中心単語が
同じ単語です。直訳すれば「彼自
身の父親の所に行った」だからで
す。「我に返る」とは自分の父の
許に帰ることなのです。けれども、
その時には最早、父の息子である
資格を失っているのです。自由を
与えられた人間の誰もが経験する
現実が、ここにあると思います。

そのことに気付いた時、すべて
を諦めるか、それでも帰ろうとす
るか。そこで人間は二手に分かれ
ます。諦める人はいます。でも誰
もが諦める訳ではないでしょう。
その分岐点にあるのは、つまり右
に行くか左に行くかを決定させる
のは、愛の記憶であり、想起(思
い起こすこと)だと思います。主
イエス様が、二人の息子のたとえ

話の前に語ったたとえ話では、人
間にはない神様の愛が語られてい
ました。どんな手間暇が掛かろう
が羊を捜し出し、銀貨を捜し出す
愛、見つけた時には損失を惜しま
ずに祝う愛、そういう愛で私たち
は神に愛されていることを、主イ
エスはファリサイ派の人々や律法
学者、また徴税人や罪人らに語り
かけたのです。

夏にお迎えする樋野興夫先生の
間接的な師匠のひとりで、現代の
がん研究の基礎を築いた方で、癌
研の所長もされた吉田富三という
人がこのようなことを言っていま
す。いかに偉大な業績を残した人
であれ、またいかに優れた才能の
持ち主であっても、また時代が、
「電子計算機時代だ、宇宙時代だ
といっても、人間の身体の出来と
その心情の動きとは、昔も今も変
わっていないのである。超近代的





で合理的といはれる人でも、病気になるって、自分の死を考えさせられる時になると、太古の人間にかへる。その医師に訴え、

医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、寂しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかへるのである。その時の救いは、頼りになる良医がそばにいてくれることである」(『使命を生きるということ』p.167)。

いかに偉大な業績を残した人であれ、またいかに優れた才能の持ち主であっても、がんという死の病に冒されて、自分の死に直面させられ、自分の死を考えさせられる時になると、「太古の人間にかへる。」そこにいるのは、パジャマを着た1人の病気の人に過ぎないのです。そして「静かで、寂しく、哀れな、昔ながらの一個の人間に」帰ったとき、「良医が良医として」、「良いものが良いものとして」、「愛が真の愛として」静かに立ち現れるのです。放蕩息子が

すべてを喪失して、「**我に返った**」時、一つの記憶が立ち現れたのです。

この愛を記憶しているか否か、思い出すことができるか否かが、絶望的な状況の中でも立ち上がって父の許に帰るか否かを決めるのだと思います。だから、主イエスは愛のたとえ話を二つ続け、少し唐突な形で「悔い改める罪人」に対する神さまの喜びを語ったのだし、それは「二人の息子の譬話」をするための布石だったのです。

人が神に立ち返るとき、天に大きな喜びがあるのです。神が、神の許に帰る者を喜び迎えてくださるというみ言葉を心に刻みつつ、新しい一週間、また64周年に向けての新しい一年に歩み出していきたいと思います。祈りましょう。

2019.7.7 日本基督教団千歳丘教会



15:11 また、イエスは言われた。

「ある人に息子が二人いた。

15:12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。

15:13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。

15:14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起って、彼は食べるにも困り始めた。

15:15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。

15:16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。

15:17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。

15:18 ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わた

しは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。

15:19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』

15:20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

15:21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』

15:22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。

15:23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。

15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

15:25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。

15:26 そこで、僕の一人を呼んで、
これはいったい何事かと尋ねた。

15:27 僕は言った。『弟さんが帰
って来られました。無事な姿で迎
えたというので、お父上が肥えた
子牛を屠られたのです。』

15:28 兄は怒って家に入ろうとは
せず、父親が出て来てなだめた。

15:29 しかし、兄は父親に言った。
『このとおり、わたしは何年もお
父さんに仕えています。言いつけ
に背いたことは一度もありません。
それなのに、わたしが友達と
宴会をするために、子山羊一匹す
らくれなかったではありません
か。』

15:30 ところが、あなたのあの息
子が、娼婦どもと一緒にあなたの
身上を食いつぶして帰って来る
と、肥えた子牛を屠っておやりに
なる。』

15:31 すると、父親は言った。『子
よ、お前はいつもわたしと一緒に
いる。わたしのものは全部お前の
ものだ。』

15:32 だが、お前のあの弟は死ん
でいたのに生き返った。いなくな
っていたのに見つかったのだ。祝
宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり
前ではないか。』

15・11 Εἰδέε, ὁ ἄνθρωπος τις εἰδύο
υἱούς.

15・12 καὶ εἶδὼ νεώτερος αὐτῶν τῷ
πατρὶ, Πάτερ, δός μοι τὸ ἐπιβάλλον
μέρος τῆς οὐσίας. ὁ δὲ διεῖλεν
αὐτοῖς τὸν βίον.

15・13 καὶ μετ' οὐ πολλὰς ἡμέρας
συναγαγὼν πάντα ὁ νεώτερος υἱὸς
ἀπεδήμησεν εἰς χώραν μακράν καὶ
ἐκεῖ διεσκόρπισεν τὴν οὐσίαν αὐτοῦ
ζῶν ἀσώτως.

15・14 δαπανήσαντος δὲ αὐτοῦ πάντα
ἐγένετο λιμὸς ἰσχυρὰ κατὰ τὴν
χώραν ἐκείνην, καὶ αὐτὸς ἤρξατο
ὕστερεῖσθαι.

15・15 καὶ πορευθεὶς ἐκολλήθη ἐνὶ τῶν
πολιτῶν τῆς χώρας ἐκείνης, καὶ
ἔπεμψεν αὐτὸν εἰς τοὺς ἀγροὺς
αὐτοῦ βόσκειν χοίρους,

15・16 καὶ ἐπεθύμει χορτασθῆναι ἐκ
τῶν κερατίων ὧν ἤσθιον οἱ χοῖροι,
καὶ οὐδεὶς ἐδίδου αὐτῷ.

15・17 εἰς ἑαυτὸν δὲ ἐλθὼν ἔφη, Πόσοι
μίσθιοι τοῦ πατρός μου
περισσεύονται ἄρτων, ἐγὼ δὲ λιμῷ
ὥδε ἀπόλλυμαι.

15・18 ἀναστὰς πορεύσομαι πρὸς τὸν
πατέρα μου καὶ ἐρῶ αὐτῷ, Πάτερ,
ἡμάρτον εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ ἐνώπιόν
σου,

15·19 οὐκέτι εἰμὶ ἄξιος κληθῆναι υἱός σου· ποίησόν με ὥς ἓνα τῶν μισθίων σου.

15·20 καὶ ἀναστὰς ἦλθεν πρὸς τὸν πατέρα ἑαυτοῦ. ἔτι δὲ αὐτοῦ μακρὰν ἀπέχοντος εἰαυτὸν ὁ πατήρ αὐτοῦ καὶ ἐσπλαγχνίσθη καὶ δραμῶν ἐπέπεσεν ἐπὶ τὸν τράχηλον αὐτοῦ καὶ κατεφίλησεν αὐτόν.

15·21 εἰδὲ ὁ υἱὸς αὐτῷ, Πάτερ, ἡμάρτον εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ ἐνώπιόν σου, οὐκέτι εἰμὶ ἄξιος κληθῆναι υἱός σου.

15·22 εἰδὲ ὁ πατήρ πρὸς τοὺς δούλους αὐτοῦ, Ταχὺ ἐξενέγκατε στολὴν τὴν πρώτην καὶ ἐνδύσατε αὐτόν, καὶ δότε δακτύλιον εἰς τὴν χεῖρα αὐτοῦ καὶ ὑποδήματα εἰς τοὺς πόδας,

15·23 καὶ φέρετε τὸν μόσχον τὸν σιτευτόν, θύσατε, καὶ φαγόντες εὐφρανθῶμεν,

15·24 ὅτι οὗτος ὁ υἱὸς μου νεκρὸς ἦκαὶ ἀνέζησεν, ἡ ἀπολωλὼς καὶ εὐρέθη, καὶ ἥρξαντο εὐφραίνεσθαι.

15·25 Ὦν δὲ ὁ υἱὸς αὐτοῦ ὁ πρεσβύτερος ἐν ἀγρῷ· καὶ ὡς ἐρχόμενος ἤγγισεν τῇ οἰκίᾳ, ἤκουσεν συμφωνίας καὶ χορῶν,

15·26 καὶ προσκαλεσάμενος ἓνα τῶν

παίδων ἐπυνθάνετο τί ἂν εἴη ταῦτα.

15·27 ὁ δὲ εἰαυτῷ ὅτι Ὁ ἀδελφός σου ἦκει, καὶ ἔθυσεν ὁ πατήρ σου τὸν μόσχον τὸν σιτευτόν, ὅτι ὑγιαίνοντα αὐτὸν ἀπέλαβεν.

15·28 ὠργίσθη δὲ καὶ οὐκ ἤθελεν εἰσελθεῖν, ὁ δὲ πατήρ αὐτοῦ ἐξελθὼν παρεκάλει αὐτόν.

15·29 ὁ δὲ ἀποκριθεὶς εἰπὼ πατρὶ αὐτοῦ, Ἴδου τοσαῦτα ἔτη δουλεύω σοι καὶ οὐδέποτε ἐντολήν σου παρήλθον, καὶ ἐμοὶ οὐδέποτε ἔδωκας ἔριφον ἵνα μετὰ τῶν φίλων μου εὐφρανθῶ·

15·30 ὅτε δὲ ὁ υἱὸς σου οὗτος ὁ καταφαγὼν σου τὸν βίον μετὰ πορνῶν ἦ, ἔθυσας αὐτῷ τὸν σιτευτόν μόσχον.

15·31 ὁ δὲ εἰαυτῷ, Τέκνον, σὺ πάντοτε μετ' ἐμοῦ εἶ, καὶ πάντα τὰ ἐμὰ σά ἐστιν·

15·32 εὐφρανθῆναι δὲ καὶ χαρῆναι ἔδει, ὅτι ὁ ἀδελφός σου οὗτος νεκρὸς ἦκαὶ ἔζησεν, καὶ ἀπολωλὼς καὶ εὐρέθη.